

えっ？

平凡ですよ??

2

登場人物
紹介

アレス ▲

オリヴィリア伯爵の
補佐官 兼 騎士。

エレン ▲

リアナの友達。

レオーネ ▲

心優しい治療師。

ヴィオ ▲

オリヴィリア領に
訪れたお客様。

▲ オリヴィリア ▲
伯爵夫妻

リアナの両親。大変お人好し。
娘を溺愛している。

▲ ゆかり

平凡な女子高生だったが、
不慮の事故で命を落とし、
リアナとして転生する。

シリウス ▲

リアナの家庭教師。
美形だが、いつも無表情。

ミーナ ▲

異世界で初めてできた、
リアナの友達。

リアナ ▲

前世の記憶を持って
生まれた少女。
ちよびり不便な異世界の
暮らしを豊かにしようと、
奮闘する。

目次

えっ？ 平凡ですよ??
2

きせかえごっこ

255

7

えっ？
平凡ですよ??
2

第一章 縁を結ぶ者と祝福された花嫁

ほのかにただよう芳ばしい香りを楽しみながら、私とお母様はカフェオレを口に運ぶ。ミルクとコーヒートの絶妙なコンビネーションとまろやかな口当たり、自然と笑みがこぼれた。

こうして地球と同じ飲み物を口にする、自分がどこにいるのかを忘れそうになる。私がいるのは、異世界のセイルレーンなのに……

さて、突然ですが、私には前世の記憶があります。日本の女子高生として平凡に暮らしていた、橘ゆかりの記憶が。

私は前世で、交通事故により命を落とした。そして今は、リリアナ・ラ・オリヴィリアという名前の九歳の少女として生きています。つまり転生をしたわけですが、なんと私、今世では伯爵家の娘に生まれたんです。と言っても、貧乏伯爵家だけだね。

セイルレーンの文化レベルは、地球でいうと中世ヨーロッパのような感じ。少しだけ不便です。そしてこの世界には、十二の国々がある。このすべての国で、なんと同じ宗教が信仰されているんです。また、神様から人に加護が与えられたり、精霊がいたり、誰もが魔法を使えたりする。

私は最近、その魔法を学んでいる。だけど、苦戦中。

どうやら私は魔力が高いようなんですが、コントロールが上手くできないんです。他にもまだまだ未熟なところがたくさんあります。でも、そんな私を優しい愛情で包みこんでくれる家族がいるから、私は日々の訓練を頑張れます。

前世では、あまり親孝行ができなかったからね。せっかく地球の知識や高い魔力があるのだから、それらをフル活用して、大好きな人達のために役立ちたいと思っています！

心の中でそう意気込んでいると、お母様が優しい微笑みを私に向けてきた。

「美味しいわね、リリアナちゃん」

「そうですね、お母様。でも、お父様もここにいれば、きつともっと美味しく感じる事ができたのじゃないか」

いつもならばこの休憩タイムにはお父様もいるのですが、今日は領内の視察に行っていて不在なんです。オリヴィリア領の領主であるお父様は、色々忙しいみたい。だから今は、お母様と私の二人きりで、お庭で休憩中。

私はそっとため息をついて、少しだけ肩を落とす。

ティータイムや食事は、人数が多い方がより美味しく感じるんだけどな。

「そうね。でも、ルイスも今頃、休憩しているかもしれないわよ。そしたら、同じ空の下で一緒に休憩していることになるわ」

お母様はお父様が休憩する姿を想像したのか、幸せそうに笑う。ちなみにルイスというのは、お父様の名前。お母様はアリスです。

「そう考えると素敵ですね。カフェオレが一段と美味しくなりました。それにしても、お母様とお父様は、いつまで経っても新婚さんみたいです」

お母様は、ロマンチストだね。さすがはラブラブ夫婦。

そんな風に思っていたとき、ふと、あることに気がついた。

「そういえば、私は二人が夫婦喧嘩しているところを見たことはありません」

もちろん喧嘩なんてしないほうが幸せだよ。だけど、いくら仲が良いからって、まったく喧嘩しないなんてこと、ありえるのかな？

「うふふ、リリアナちゃんにだけは特別に教えてあげるわね」

お母様はカフェオレの入った器を机の上に置くと、ひとさし指を立てて、口元に当てる。

「私達、出会ってから結婚するまでは、顔を合わせるたびに喧嘩をしていたのよ」

お母様は頬を染めながら、そう告白した。

「ええー！お父様とお母様がですか!？」

私は思わず椅子の上で仰け反り、後ろに倒れそうになった。

うう、危ない、危ない。それにしても、いつものほほんと微笑んでいるラブラブ夫婦のお父様と

お母様が、会うたびに喧嘩!?

お母様は、クスクスと笑いながら続ける。

「ちなみに、初めて出会ったのは王宮だね」

「王宮!？」

私の驚きをよそに、お母様は「ええ」と言いつつ悠然としている。そっか、お母様は貴族のお嬢様だったんですね。それなら、王宮にも行ったことがありますか。

「当時は誰もが私のことを腫れ物に触るよう扱っていたのに、ルイスだけは私を真正面から睨みつけてきたのよ。そのとき、私の運命の人はこの人だわ、と胸が高鳴ったの」

えっ!? 睨まれたのに胸が高鳴ったって……お母様、それってマゾ……いや、気のせいだよな? そういうことにさせていただきます。世の中には、触れちゃいけないことって、やっぱりあると思うんだ。それより、気になるのは……

「お母様、腫れ物って……」

「そのときの私は、ちよつと荒れていてね。皆が怖がつて近寄ろうとしなかったのよ」

お母様は恥ずかしそうに微笑んだ。

「想像がつきません!」

お母様、どれだけまわりの人に恐れられていたんですか。前世の世界でいうところの、ヤンキーみたいな存在だったとか? うわあ、今のオチャメでおっとりしたお母様と正反対。若気の至りというやつでしょうか。

驚いてしまった私は気持ちを落ち着かせるために、机の上の器を口に運ぶ。

「あらっ、リリアナちゃん。私だけじゃなくて、ルイスも今では考えられないくらいにツンツンしていたのよ」

「うっ、ゴホッ、ゴホッ!？」

私はカフェオレにむせて咳きこんでしまった。お母様はあらあら、と笑いながら、私の背中を優しく撫でてくれる。

「ありがとうございます、お母様。でも、あのお父様がツンツンだったんですか!？」
表現は可愛いけど、お父様とツンツンなんて結びつかないよ。

だって、お父様はいつも笑顔で、とにかくお人好しなのに。

「うふふ、意外でしょ」

意外すぎるよ。もしかして二人は、元ヤン夫婦ってこと!？」

「出会ってからの私は、なにかとルイスに言いがかりをつけて喧嘩をしたわ。そうやって、ルイスに付きまとったのよ。小さな子が好きな人に構ってほしくて、ついついイジメちゃうのと同じようなものね」

お母様は当時を思い出したのか、小さな笑い声を上げる。

「私達はそのときたくさん喧嘩をしたから、今はもう喧嘩をしないの。だけど、リリアナちゃんは好きな人ができても、素直なままでいてね。一度意地を張ってしまうと、そのあとはなかなか素直になれないから」

喧嘩ばかりしていたのに、お父様と相思相愛になれて良かったですよ、お母様。そのおかげで、今の私がいるわけですから。

「たくさんぶつかったし、色々あったけれど、私達は結婚したの。そう、ちょうど今の季節にね。懐かしいわ」

お母様は目を細めながら微笑んで、カフェオレを飲みほした。

「さあ、休憩はおしまい。今日の話はお父様には内緒よ。昔ツンツンしていたことがリリアナちゃんにバレたって知ったら、落ちこんでしまうだろうから」

そうして、私とお母様の休憩タイムはお開きとなった。

「お父様、アレスさん!」

私は視察から帰ってきたお父様と騎士のアレスさんを捕まえるため、廊下をパタパタと走った。ちなみにアレスさんは、お父様の補佐官でもあります。

「こちら、廊下を走ってはいけませんよ。そんなに急いでどうしたんだい、リリアナ?」

お父様は、私と目の高さを合わせるように身体をかがめて言った。

「うっ、ごめんなさい、お父様。今後、気をつけます」

「分かればいいんだよ」

お父様は笑いながら、私の頭を優しく撫でてくれる。その大きな手の温もりが心地良くて、私は目を細めた。

「ところで、なにか用があったんじゃないのかい、リリアナ?」

あっ、そうだった。肝心なことを忘れるところでした。

「お父様、ちよっとの時間、アレスさんをお借りすることはできますか?」

私はお父様を見上げて、お願いした。

「アレスを？」

「私ですか？」

お父様は眉を寄せ、アレスさんは驚いた様子で自らの顔を指差している。

「リリアナ、アレスになんの用だい？」

「秘密のお話です」

「秘密のお話？」

お父様とアレスさんの声が重なる。

「リリアナ、私にもその秘密を教えてくださいませんか？」

お父様はにっこりと笑いながら、私に詰め寄る。

笑っているのに、なんだかその笑顔は妙に怖い気がします。なんでだろう？

「お父様に話してしまうと、秘密じゃなくなっちゃうので、内緒です」

私はひとさし指を口元に当てて、そう言った。

「アレスには言えて、私には言えないことなのかい？」

お父様は悲しそうな顔で、私に訴えてくる。

うう、言いたいけど今はダメなの、お父様。ごめんなさい。

私は心を鬼にして頷き、アレスさんの腕を引っ張った。

「うわぁ、私に触らないでください、リリアナ様！」

アレスさんは大袈裟に叫んで、飛び上がった。

「酷いです、アレスさん！」

私に触られるのがそんなに嫌なんですか。さすがに落ちこみます。私が眉を寄せると、アレスさんは困ったように言う。

「酷いのはリリアナ様の方ですよ。あとで私がねちねち言われるんですからね！」

ねちねち？ 一体、誰に？

首を傾げながらも、この『秘密のお話』ができるのはアレスさんしかいないので、私は彼の腕を引っ張って歩き出した。アレスさんは仕方がないとばかりに足を動かす。ふと振り返ると、お父様が私とアレスさんの後ろをとぼとぼとついてきていた。

「お父様！」

「なんだい、リリアナ？」

笑って誤魔化そうとしていますね。だけど、この話はお父様に聞かれちゃマズイので、ついてきたらダメなんです。仕方がない。心は痛みますが、かくなる上は……

「これ以上ついてきたら……」

「ついてきたら？」

「お父様のことを嫌いになります！」

その瞬間、お父様はまるで凍ってしまったかのように固まった。

「ルイス!？」

おお、アレスさんが動揺して、お父様のことを名前ですりゃ呼んでるよ。いつも人前では領主

様って呼んでるのに。

でも、ここまで言ったら、さすがのお父様も諦めてくれるでしょう。

ごめんなさい、お父様。

私は心の中で謝りながら、足を止めてしまったアレスさんの腕を再び引つ張った。

「アレスさん、今のうちです。早く行きましょう」

アレスさんはお父様の様子が気になるのか、何度も後ろを振り返っている。私はそんな彼を引きずりながらしばらく歩き、誰もいないのを確認してから、使っていない部屋に入った。扉を閉めて、息を吐く。

ふう、これで思う存分に、あの話を聞けますね。

額の汗を腕で拭いながらアレスさんを見ると、彼は涙目になっていた。

「アレスさん、どうしたんですか？」

「絶対に、あとでねちねちグチグチ、しつこく領主様に絡まれる……」

アレスさんは肩を落しながら、大きなため息をつく。

もしかして、お仕事の邪魔をしちゃったから、アレスさんがお父様に怒られちゃうってことなのか？

「アレスさん、ごめんなさい。お父様には、あとで私がきちんと謝ります。私が悪いのですから、アレスさんのことは叱らないでくださいってお願いします。安心してください」

私はそう言って、にっこりと微笑んだ。

だけど、アレスさんはますます青ざめ、頭を激しく左右に振る。

どうしたの、アレスさん？

「リリアナ様、それだけはやめてください。余計に勘繰られて、めんどろくさいことになりませ……」

余計に勘繰られる？ どういうことだろう？

「はあ……分かりました」

本当は分かっているけれど、私は頷くことにした。

気になるけど、お仕事の途中に連れ出してしまったのだから、早く話を聞いて、アレスさんを解放しなくちゃ。

「実は、アレスさんに教えてほしいことがあるんです」

「私に分かることだったら、なんでもお答えしますよ」

アレスさんは少し投げやりな感じの笑みを浮かべて、ハイハイと頷いた。

「アレスさんは、お父様とお母様がいつ結婚したのかご存知ですか？」

さつき、お母様はちょうど今の季節に結婚したって話してくれました。つまり、結婚記念日が近いってことだね。だから、そのお祝いをしたいんです。私は休憩が終わったあと、家事のお手伝いをしながら、さっそく二人の結婚した日にちを用人達に聞いてみた。だけど、誰も知らなかったの。そこで、アレスさんに聞くことにしたのだ。

「アレスさんは、オリヴィリア領に来る前からお父様やお母様と親交がありましたよね」

「ええ、そうです」

アレクサンダーは王都にいたときから、お父様の部下であり親友だった。そんなアレクサンダーなら、お父様とお母様が結婚した日を絶対に知っていると思っただんだ。

「誰に聞いても知らなくて、困っていたんです」

「そうでしょうね。結婚式に参列したのは私だけですから」

「えっ!？」

結婚式って、普通は友人知人、いや、少なくとも身内くらいは参列するものじゃないの？ お父様とお母様の結婚式の出席者がアレクサンダーだけ？ どうして？

「二人は、このオリヴィリア領で式を挙げました。ですが、結婚したのがこの地を拝領してすぐということもあり、領民達から祝福はされませんでした。前領主がアレでしたからね……当時の領民は、領主に不信感を持っていました。だから、誰も知らないし、覚えていないのです」

私はずっと、王都で式を挙げたから、皆知らないんだと思ってたよ。そうだよ。不信感があつたって、仕方がないよね。だって、前領主は領民を誘拐して人身売買をしていたのだから……。前領主は粛清されたけど、当時は後任のお父様への風当たりも相当強かったんだろ。今では多くの領民達から慕われているのだから、お父様は本当に凄いです。お父様のやってきたことが、評価されているってことだからね。

「あれっ、でも、お父様とお母様の家族は？ なぜ式に出なかったんですか？」

「いえ……イロイロ……そう、イロイロありまして……」

アレクサンダーは、気まずそうに私から目をそらす。

「イロイロ？ アレクサンダー、なぜ私から目をそらすのですか？」

アレクサンダーの顔をじつと見つめると、彼はしぶしぶといった感じで口を開いた。

「内緒ですよ。二人の結婚は……実は、駆け落ちのようなものだったんです」

「ええ……」

私がおもわず叫ぶと、アレクサンダーは慌てて私の口を手で塞ぐ。

「リリアナ様！ そんな大声を出したら、私がリリアナ様に変なことをしたんじゃないかと思われる、領主様が飛んでくるじゃないですか!？」

うう、確かに。心配性で過保護なお父様だから、その可能性は否定できません。

私は口から手を離してもらおうと、アレクサンダーの腕を軽く叩く。

「もう大声は出しませんか？」

私が頷くと、アレクサンダーはそっと手を離した。

「アレクサンダーが、いきなり駆け落ちだなんて言うからですよ。もう、ビックリさせないでください。で、駆け落ちって、本当なんですか？」

「ルイスが……リリアナ様のお父様がオリヴィリア領を拝領すると決まって王都を去るとき、奥方様を連れてくる気はなかったんです。当時、奥方様は社交界の華でしたからね。田舎暮らしは無理だとルイスは考えていたのでしょう。しかし、奥方様はなにも言われていないにもかかわらず、自分も行く気でいて……結婚の話すら出ていなかったのに。まあ、それ以外にも家同士の話が絡んで、

それは大変だったんですよ……」

「どうやら、あまりいい思い出じゃないらしい。表情を曇らせたアレスさんは、遠い目をして話をぼかした。」

それよりお母様……駆け落ちというより押し掛け女房？

そのイロイロの中に、お母様の背中にある傷痕の原因も含まれているのでしょうか。きっと、関係ありそうですね……

昔はツンツンしていたとか、駆け落ちしたとか、私の両親の過去は、聞けば聞くほど驚くことばかりです。

「それで二人の結婚した日ですが、確か五日後ですよ」

「五日後!？」

アレスさんの言葉を聞き、私は大声を上げてしまった。

「ええ、そうですね。でも、どうしてそんなことを？」

アレスさんは、不思議そうに尋ねてくる。

「だって、結婚記念日じゃないですか！ お祝いしないといけません!!」

何をするのかにもよるけど、あと五日で準備できるかな……

「結婚記念日？ リリアナお嬢様、なぜお祝いしないといけないのですか？」

アレスさんは恐ろしいことを言い出した。

お祝いしなくちゃダメでしょう。だって、二人が永遠の愛を誓った記念すべき日ですよ。娘の私

がお祝いせず、誰が祝うと言うんですか！

それにアレスさん、お父様の親友なのに冷たいです。お友達の日には、お祝いしましょうよ。「こんなことは言いたくないのですが……アレスさん、もしかして嫉妬ですか？」

「違います！」

アレスさんは、紅玉髓色の髪を振り乱しながら否定する。

「本当ですか？」

私は疑いの眼で、アレスさんをまじまじと見つめた。

嫉妬じゃなければ、その発言は出てこないと思うんだけど。

すると、アレスさんは困ったように言った。

「結婚した日を祝ったり、その日を結婚記念日と呼ぶなんて、聞いたことがありません。ですから、なぜ祝うのかお尋ねしただけです」

あれっ？ もしかして……結婚記念日を祝う習慣がこちらの世界にはないの？

それなら、なんで祝うんだろうって不思議にも思うよね。嫉妬なんて言ってしまうってごめんささい、アレスさん。

「えっと……せっかくなので、結婚した日を記念日にしようと思っただけです。その日には、日頃の感謝の気持ちを込めて二人でゆっくりしてもらい、私もお祝いしたいなって」

いつもお仕事や家事で忙しいお父様とお母様に、せめてその日だけでもゆっくりしてもらいたい。アレスさんは、ふんふんと頷きながら言った。

「確かに、そういう日があってもいいかもしれませんがね。オリヴィリア領に来てからというもの、お二人は仕事や家事に追われて忙しすぎましたから。なによりリリアナ様に祝ってもらえれば、お二人は手放しで喜ぶますよ」

「私よりも長くお父様とお母様の側にいるアレスさんにそう言ってもらえると、力強いですね。えへへ、喜んでもらえたらうれしいな。」

「では、その日は仕事をしなくても良いように調整しなくてははいけませんね」
「お願いします、アレスさん」

「話が早いですね。助かります。とりあえず、計画の第一段階はこれで終了。」

「それで、どうやって祝うのですか、リリアナ様？」
うっ、痛いところを突いてきたよ。そう、そこが問題なんだよね。前世だったら、贈り物をした

り、ちょっと高級なレストランに行ったり、旅行したり……ん、旅行？
「旅行です、アレスさん！ 旅行に行きましょう!!」

「旅行？ そんなに日は割けませんよ、リリアナ様」
アレスさんは、困った顔をして首を横に振る。

うう、やっぱりそうですよね。とはいえ、旅行と言っても、日帰りというパターンもあるんですよ。そうだ、ピクニックなんてどうだろう。ゆっくりできて、楽しめそうです。

「ではアレスさん、お父様とお母様にはピクニックを楽しんでもらいましょう」
「ピクニック？」

アレスさんは、怪訝そうに首を傾げる。

「はい。お弁当などを持って野山や森に出かけて、のんびりすることです」

青空の下、景色を楽しみながら食事をする。そうすると、普段と同じものでも数段美味しく感じるんだから、不思議だよな。結婚記念日にピクニックをすれば、お父様とお母様の思い出にもなると思うんだ。

「遠乗りのようなものですか？ そんなことで、喜んでもらえますかかね？」

「やってみなければ分かりません。でも、きっと楽しいと思います」
だって、私はピクニックに楽しい思い出しかないもの。

「分かりました。では、そのピクニックとやらをやりましょう」

「ありがとうございます、アレスさん。さっそく今日の夕食の席で、お父様とお母様に提案してみます。もちろん、結婚記念日ということは伏せて」

「そして、ピクニックから領主館に戻ってきたお二人に、お祝いの言葉をかけて驚かせるおつもりですわね？」

「ええ、その通りです」

さすがはアレスさん。私の行動パターンを読んでいきますね。

「これで作戦は決まりました」

「作戦？」

そう、これは作戦です。その名も――

「結婚記念日大作戦です！」

その日の夜、皆が集まった夕食の席でパンを手取る。

食事は家族全員で、が我が家のルールですからね。お父様とお母様の他にも、アレックスさん、私の家庭教師であるシリウス先生、使用人達……大勢でいただきます。可愛い双子の弟妹達——ラディとレティは、一足先に食事を終えて眠っています。

私は食卓を見渡したあと、お父様とお母様に話しかけようと思いました。だけど、お父様に先を越されてしまった。

「リリアナ、今日はアレックスと二人きりで、一体なにを話していたんだい？」

お父様を見ると、顔が強張っている。いつも笑顔なのに珍しい。そんなにさっきのことが気になっているのかな……ごめんなさい。嫌いになって絶対になりませんかね、お父様。

「ルイス、子供の心配をするのは親として当然のことよ。けれど、すべての行動を把握しようとするのはいただけないわ。リリアナちゃんにだって、知られたくないことの一つや二つはあるはずよ。女の子には、それくらいの秘密があるものなの」

「しかし、なにか問題があつてからでは遅すぎる」

お父様はお母様に反論しながら、食事をしているアレックスさんを睨みつける。アレックスさんは気まずそうに目をそらした。

「ルイス、八つ当たりはいけないわ」

ああ、マズイ。結婚記念日を前に、私のせいで空気が悪くなってるよ。なんとかしなくちゃ。

「実は、アレックスさんに、ちょっと相談したいことがあったんです」

「相談？」

お父様とお母様の表情が曇った。

「リリアナ、お父様だって、いつでも悩みを聞くよ」

「そうよ。力になれることがあるかもしれないもの」

二人は私を気遣うように声をかけてくれる。やっぱり優しいな。

「ありがとうございます。でも、安心してください。悩みがあるわけではありません。五日後、お父様とお母様がピクニックに行けるよう、予定を空けてもらえないかとアレックスさんに相談していただきます」

「ピクニック？」

二人は、ピクニックがなにか分からなかったみたい。声が揃っています。

「ピクニックは、遠乗りのようなものです。私がお弁当を用意するので、野山や森に行つてのんびりしてみてもどうでしょうか？ きつと楽しいですよ」

「まあ、それは良いわね。親子水入らずで、ぜひ行きたいわ！」

明るくはしゃいだ様子で、お母様が私の提案に賛同する。

「たまには皆で出かけるのもいいね」

さっきまで硬い表情をしていたお父様も、頷いている。

「ただ、二人とも誤解しています。」

「違います。お父様とお母様の二人きりで行くんですよ。私達は参加しませんから。でも、安心してください。ラディとレティは、私や使用人の方達できちんと面倒を見ます。赤ちゃんをピクニックに連れていくとなると、色々準備が大変ですからね。」

「そうやって、私はパンを口に入れた。」

「うん、今日のパンもふんわり美味しく焼けていますね。さすがは料理長さんです。」

「すると、お父様とお母様は酷く青ざめて、この世の終わりといわんばかりに声を上げた。」

「なんですって、リリアナちゃん！ 私達と一緒に出かけするのが、そんなに嫌なの!？」

「これが噂の反抗期か！ まさか、こんなに早く訪れるとは……神はなんと悲しき試練を与えるのか!!」

「オーバリアクションだよ、二人とも。落ち着いてください。あと、反抗期でもありませんから。いつもだったら喜んで一緒に行きます。でもね、今回は二人の結婚記念日ですから、夫婦で楽しんでもらいたいです。だから、分かってください。」

「お父様とお母様は、二人きりになるのが嫌なんですか？」

「私は、わざと心配そうに二人を見つめる。」

「そんなことあるわけじゃない、リリアナちゃん」

「そうだよ。私とアリスの仲が良いのは、リリアナだって知っているだろう？」

「焦ったように二人は手を繋ぎ、私に仲睦まじい様子をアピールしてくる。」

「もちろん知っています。だからこそ、いつもお仕事や家事で忙しいお父様とお母様に、たまには二人きりでゆっくりしてもらいたいと思ったんです。なので、反抗期だとか、そういう変な心配はしないでくださいね」

「私は誤解を解くために、両手を振って説明する。」

「そういうことだったの。ありがとう、リリアナちゃん。じゃあ、五日後に二人でピクニックというのを楽しんでくるわね」

「お母様は頬を薔薇色に染め、微笑んだ。」

「ありがとう、リリアナ。五日後のピクニックは二人で楽しんで……うん？ 五日後？」

「なにに？ お父様、どうしたの？」

「リリアナ、せっかくだから、やっぱ私達だけじゃなく、リリアナにラディやレティ、シリウス君、それからここにいる皆で行かないかい？」

「お父様は皆の反応をうかがうように、食卓を見まわした。使用人達は、自分達も参加できるとは思っていなかったのか、うれしそうに顔をしている。」

「しまった。結婚記念日の話は、まだアレスさんにしかしていなかった。それがこんな形で裏目に出るなんて！」

「五日後……ああ、そういうこと。ねえ、そのピクニックというのは、皆でしましょ、リリアナちゃん。きつと、大勢の方が楽しいわ」

お母様は可愛らしく小首を傾げながら、私に問いかけてくる。

「いえいえ、美女のお願い攻撃は相当の威力だけど、今日だけは負けられないんです。

「ただど皆から向けられる期待の眼差しを裏切ることができず、私はこくりと頷いてしまった。

「うふふ、良かった。楽しみね、リリアナちゃん」

「全員一致のようだね。では――」

「お待ちください」

お父様の声を遮った人物に、全員の視線が集まる。それは、いつも無表情で冷たい印象のあるシリウス先生だった。

「私は不参加とさせていただきます。他の皆様だけでお楽しみください」

シリウス先生！そこは空気を読んで参加するところですよ!!

「というか、不参加を表明するのであれば、使用人の皆が喜ぶ前にしてほしかったです。そうすれば皆遠慮して、お父様とお母様の二人きりでのピクニックが実現したかもしれないのに。

でも、今は皆で参加することが決まったんです。シリウス先生、ただ館に置いてきぼりなんて、寂しすぎます。」

お父様とお母様も、シリウス先生を説得しようと口を開いた。

「そんなことを言わずに、シリウス君もぜひピクニックに参加してほしい」

「そうよ。そもそも館からあまり出ないのだから、身体に悪いわ。たまには、外出も必要だと思うの。これは命令ではなく、私達からのお願いよ」

「シリウス先生、私からもお願いです。ぜひ、一緒にピクニックに行きましょう。……あっ、そうだ！」

私は名案を思いついて、両手を叩いた。

「ではシリウス先生は、ピクニックの最中、私に校外学習を行ってください」

「校外学習……ですか？」

「はい。家の外でなにかを体験したり見学したりしながら、学習することです。もちろん、引率として先生も一緒ですよ」

強引な方法ですが、仕方ありません。ここまでしなきゃ、絶対に来てくれないでしょう。先生は団体行動が苦手そうだし。

「……分かりました。今回だけですよ」

シリウス先生がしぶしぶ頷くと、張り詰めていた空気が和らいだ。

「良かった！」

作戦は少し変更になっちゃったけど、なにはともあれ、ピクニックに行くことが決まって良かったよ。

「では、決定です。五日後のピクニックは、皆で楽しみましょうね！」

澄み渡る青い空、頬を優しく撫でる心地好い風、そしてあたり一面に広がる色とりどりの花。

「今日は、絶好のピクニック日和ですね！」

気分が高揚した私は、両手を広げて野原を駆けまわりながら、お父様とお母様に話しかけた。

「ああ、本当に良い天気だ」

「きっと、お空がリリアナちゃんの気持ちに伝えてくれたのね」

お父様とお母様は、微笑ましそうに私を眺めている。領主館から少し離れたところにあるこの野原に、馬車に揺られて、皆でピクニックにやってきました！

ピクニックをすると決めてから一番張り切っていたのは、実はお父様。このお花畑にしようと思ったのも、お父様です。私はあまり出かけないから、良い場所が分からなかったんだよね……。詰めが甘くてごめんさい。

ちなみに五日前の夕食のあと、シリウス先生や使用人の方達にもピクニックの主旨をこっそり伝えました。皆、二つ返事で結婚記念日を祝うことを了承してくれましたよ。

計画は、ピクニックがお開きになる直前に、皆で『結婚記念日おめでとう！』と言って祝うという、ごくシンプルなもの。だって、たった五日で用意できることって意外となかったんだもの……。来年は盛大にやるので、今年はこれで許してくださいね、お父様、お母様。

「あうっ、キヤー」

「バブー、アアー」

「ラディとレティもうれしそうだね。ピクニックをしようと提案してくれたお姉様に、感謝しなくてはいいじゃないよ」

お父様はそう言いながら、シェリーさんに抱っこされているラディとレティに目を向ける。

今日は、いつも育児で大変なお母様にゆっくりしてもらいたい。だから、前に臨時の乳母として雇ったことのあるシェリーさんに、ラディとレティのお世話を頼みました。それにしても赤ん坊とはいえ、二人一緒に抱っこするなんて意外と力持ちなんですな、シェリーさん。

「さて、さっそくお昼にしようか」

お父様の言葉に、私は頷く。

「はい。私もお手伝いします」

レジャーシート代わりの敷物を使用人から受け取って広げる。

「皆さん、敷物が飛ばされないように、荷物を上に載せるか、もしくは座ってください」

私の掛け声に、皆はそれぞれ好きな場所に座っていく。次はお待ちかねの……

「今日のお昼は、サンドイッチですよ！」

ピクニックのお弁当といったら、やっぱりおにぎりかサンドイッチでしょう。ただ、この世界にはお米がないので、おにぎりは断念です。でも、地球と生態系が似ているセイルレーンなら、きつとどこかにお米があるはず。いずれ、必ず手に入れてみせるんだから。元・日本人の意地です。

というわけで、本日のお弁当はサンドイッチ。新鮮な卵とお野菜を使いました。

「たくさん召し上がってくださいね。だけど食事の前に、この濡らした手巾で手を綺麗に拭いてください。じゃないと、悪いものまで身体の中に入っちゃいますからね」

皆は私の言葉を聞いて笑っていたけれど、一応は手を拭いてくれた。

衛生観念がないから仕方がないか。でも、病気になつてから困るのは皆さんなんですからね。
「皆さん、手を拭き終わつたようですね。お父様、お願いします」

やっぱり、ここは家長たるお父様にひとこと言つていただかなければ。

「皆、今日はゆつくり楽しんでくれ。それでは、森の実に感謝いたします」
「森の実に感謝いたします」

こちらの世界での『いただきます』を皆が口にして、サンドイッチに手を伸ばす。

「朝からお弁当を用意してくれてありがとう、リリアナ。とても美味しいよ」

「卵がふわふわで美味しいわ、リリアナちゃん」

お父様とお母様は微笑みながら、うれしい言葉をかけてくれる。

「青空の下で食べると、最高に美味しくなるんですよ。それに……」

私は立ち上がり、敷物の端の方で一人黙々とサンドイッチを食べているシリウス先生のもとへ向かつた。

「シリウス先生、こんな端っこじゃなくて、こつちで皆で食べましょ」

シリウス先生の腕を掴み、引つ張つて立たせようとする。

「リリアナ様、離してください」

「シリウス先生がこつちに来るまで、離しません」

「いつから、そんなに聞き分けがなくなつたのですか」

先生は、不機嫌そうに眉を寄せた。だけど、私は諦めません。一人は気楽かもしれませんが、皆

と一緒にいた方が世界は広がりますよ、シリウス先生。

「私はいつだって我が儘娘です」

そう言うと、シリウス先生は根負けしたように立ち上がり、私に引つ張られながらついてくる。

「シリウス君を連れてきたのか。良い仕事をしたね、リリアナ」

お父様はクスクスと笑つた。

「話の途中で立ち上がるから、どうしたのかと思つたわ」

「お行儀が悪くてごめんなさい、お母様。だけど、食事は皆でいただくときさらに美味しくなり

ます」

「その通りだわ」

皆は、優しい笑みを浮かべている。

私は先ほど座つていた位置に腰を下ろして、空いている隣のスペースを軽く叩いた。

「シリウス先生はここに座ってください。早く食べないと、お弁当がなくなっちゃいますよ」

シリウス先生は私の隣に座り、手を伸ばしてサンドイッチを食べる。

「こちらは随分と賑やかですね」

「当たり前です。だって、楽しいですから」

「そうですか。……これ、美味しいです」

先生その小さな声が聞こえたのは、きっと私だけだと思う。だけど、今はそれで満足。

「良かったです」

私はそれだけ答える。少しずつでもいいから、先生の世界も広がっていけばいいな。

野外だといつも食が進むらしく、サンドイッチはあつという間になくなってしまった。

「ふう、お腹いっぱいです。お父様とお母様は、これからどうしますか？」

「私達は花を眺めながら、ゆっくりするよ。普段は、そんな時間は取れないからね」

ピクニックに誘った甲斐がありました。ぜひ、くつろいでくださいね。

「リリアナちゃんとシリウスは、お勉強をするのよね？」

「はい、校外学習をします。シリウス先生、そろそろ行きましょうか」

私は用意してきた持ち手のついた籠を左腕に下げ、野原の中でも花がたくさん生えていそうな場所を目指して歩き出した。シリウス先生も、私のあとに続きます。

「お父様、お母様、行ってきます！」

私は後ろを振り返り、右手で大きく手を振った。

「気をつけて行ってくるのよ」

「危ないことをしてはいけないよ」

もう、二人とも心配しすぎです。

私とシリウス先生はそのまま野原を歩き続けて、花畑が一望できる場所で足を止めた。うん、こちら辺でいいかな。

「シリウス先生、このあたりにはたくさんお花が咲いていますね」

「そうですね。それより、リリアナ様。校外学習とは口実で、ご夫妻の結婚記念日を祝うのが目的

なのでしよう。私がついてきた意味は、あるのでしょうか……」

シリウス先生は、ため息をつきながら呟く。

「もちろんです。今日は校外学習として植物採取をしつつ、お父様とお母様の結婚記念日も祝う、一石二鳥な日ですよ」

私は足元に生えていた白い花を摘み、その香りを嗅いだ。

うん、良い匂い。見た目はマーガレットみたい。

「先生、このお花はなんという名前ですか？ なんだか林檎のような甘い匂いがします」

「それはカモミールですね。昔から治療師達は、薬草として料理などにもよく使用しています。花言葉は、あなたを癒す、苦難に耐える、親交、などです」

おお、この世界にもカモミールがあるんだね。それに、花言葉まで。へえ、このお花がそうなんだ。色々と使えそうだから、持って帰ろう。

私はカモミールを摘んで、籠の中に入れていく。

「今日は、こうやって植物採取しながら学習したいです。それから摘んだお花で花冠を作ろうと思います。それをお父様とお母様に贈りたいんです」

お父様は男性だから、あまり喜んでもらえないかもしれないけれど、お母様はお花が好きだから喜んでもらえると思うの。

「本当はもっと良い物を贈りたかったのですが、時間が足りなくて……」
服や小物は、作る時間が足りなくて諦めました。

お父様もお母様も、『おめでとう』の言葉だけで喜んでくれるとは思うけど、やっぱりなにもないのは寂しいので、花冠を思いついたんです。

「リリアナ様が気持ちを入れて作った物であれば、お二方とも喜びますよ。分かりました。それでは、校外学習を始めましょう」

そう言うと、シリウス先生は足元に生えていた藤色の花を何本か摘み、私に差し出した。

「花冠を作るのでしょうか？ 私はあいにく作れませんので、一人で頑張らなくてはいいけません」

「はい、シリウス先生！」

私はその花を受け取って、さつそく編み始めた。先生が乗り気になってくれたことがうれしくて、自然と顔が綻ぶ。

「先生、このお花の名前は？」

「ゲラニウムで、花言葉は変わらぬ信頼です」

おお、さすがは先生。この校外学習はとっても勉強になります。

「うふふ、変わらぬ信頼か。それもお父様とお母様に当てはまりますが、どちらかというと、変わらぬ愛の方が似合っている気がします」

だって、二人はいつでもどこでもいちゃついているような、万年新婚夫婦ですからね。

すると先生は、また教えてくれます。

「お二方には、赤いカーネーションが合いそうです。花言葉は、熱烈な愛」

「うわあ、ピッタリです！」

やっぱり、シリウス先生からもそう見えるんですね。

私達は、顔を見合わせて笑った。

先生の眼差しが少しだけやわらかくなった気がする。いつもそんな表情だったら良いのにね。そうやって楽しく過ごしているうちに、花冠はあつという間に出来上がった。

「完成です！」

私は、出来上がった二つの花冠を両手で掲げる。

「よくできました、リリアナ様」

私はふと思いつき、座っている先生の頭に花冠の一つを載せてみた。

「リリアナ様!？」

「似合っていますよ、シリウス先生。いつもより、親しみやすく友好的に見えます」

「いい歳をした大人が花冠を載せている姿は、滑稽です」

先生はため息をついた。自虐的ですね。でも言われてみれば、無表情で花冠を載せている姿はシニールかも……。先生、ごめんなさい。

私は花冠を回収して籠の中に入れ、その上に手中を広げた。

こうすれば、中身を隠せます。サプライズですからね。

「さて、意外と早く完成しちゃいましたね。まだ時間もありませんし、あつちの木がたくさん生えている場所に行ってみませんか？」

私は少し離れた森の方を指さした。このままお昼寝するのも気持ち良さそうですが、探検も面白



そうですからね。

「そうですね。ここに群生ぐんせいしているものは、あらかじめ説明しましたし。今度は樹木の勉強をしましょう」

さすがは先生です。どんなときも、先生という仮面を外しませんね。

「はい。シリウス先生、行きましょう」

私達は、森の方へ歩き出した。

「それにしても、本当に空気が美味しいです」

「リリアナ様、空気に美味しいも不味まずいもありません」

シリウス先生は真面目に返す。

確かに、空気に味はないんだけど……前世では排気ガスなんかで空気が悪かったから、ついつい出ちゃったよ。

「緑が多いと、世界が美しく見えます。私達は『自然』に生かされているんだなあと実感したせいか、空気も綺麗で美味しいと思っただんです」

「……それは、精霊の調和のことですか？」

精霊の調和？

私は首を傾げながらも、精霊という言葉にワクワクする。

シリウス先生に精霊の存在を教えてもらってから一年近く経つけれど、私は未だに精霊を視みたことがない。

「精霊は、あらゆるところに存在しています。前にそう話したのを覚えていらっしやいますか？」
もちろんです。この世界って魔法が使えるだけでなく、精霊までいるのかと衝撃を受けましたからね。私は頷いた。

「精霊は愛によって生み出され、この世に存在するあらゆる物質となる。そして、争いによって分離する。精霊は人々と自然の——世界の調和のために存在しているのではないか。私の師が、そう考えていたのです」

シリウス先生の口からそんなロマンチックなお話が出てくるとは、ビックリです。たとえば、それが先生の師のお話でもね。

「まあ、その説を師から聞いたときは一笑に付しましたが」

うわあ、想像つくよ。きっといつもの無表情のまま、鼻で笑ったんだろうな。

「その話が本当だとすれば、お父様とお母様は、世界の調和に随分と役立っていることになりま
すね」

なにせ、年中ラブラブ夫婦ですから。

「ええ、そうなります。さあ、着きましたよ」

私の前には、青々と葉の繁った樹木がどこまでも広がっている。

「探検開始ですね！」

「森の奥まで行くのはやめましょう。十分な時間はありませんし、危険です」

「そうですね、シリウス先生」

相槌を打ちながらあたりを見まわすと、少し先に一際太い木を見つけた。もしかして……

「あれを見てください、シリウス先生！」

「リリアナ様!？」

私は大声を上げて、思わず走り出してしまった。

足元に気をつけながらその木の根元まで来ると、自分の予測が正しかったことが分かる。

「うわあ、良いものを発見しちゃいました。これだから、探検はやめられませぬね」

「珍しい形状の木ですね。しかし、いきなり駆け出すのはやめてください。迷子になっても知りませんよ」

私に追いついたシリウス先生は、逃がさないように私の手を握ってくる。

「うふふ、あとでお父様とお母様にもこの木を見てもらいましょう、シリウス先生」

私はその木を見上げて、にっこりと笑った。

「ただ今戻りました、お父様、お母様」

お昼を食べた場所に帰ってきた私は、二人に走り寄った。

「おかえりなさい、リリアナ、シリウス君」

「おかえりなさい、リリアナちゃん、シリウス」

「アキャキヤー、アアー」

「バアー、キヤー」

ラディとレティも、お出迎えありがとうございます。

「ちょうど良かったわ。もうそろそろ領主館に帰ろうかと話していたのよ」

おお、良いタイミングで戻ってきたようですね。

周囲を見まわすと、いつ祝福の言葉をかけるのかと、皆がそわそわしている。

私はもうちょっとだけ待ってもらおうと、首を横に振って、さりげなく合図を送った。

「それにしても、ピクニックは良いわね。ゆつくりとした時間を過ごせて、とても楽しかったわ」

「それは良かったです、お母様！」

「リリアナの校外学習はどうだったんだい？」

ふふ、校外学習で良いものを見つけたんですよ。

「お父様、お母様、これから案内したい場所があるんです」

「案内したい場所？」

私は頷きながらお父様とお母様の手を握る。

「はい、とっておきの場所を見つけたんです！」

私は二人の手を引き、樹木が生い茂る森を目指して進んだ。私達の後ろから、皆がついてくる。

ラディとレティは、シェリーさんが抱えてくれていた。

そして森の前まで到着すると、お父様が不安そうな表情になった。

「随分と離れたところまで来たんだね」

「はい。木の根っこで足場が悪いので、気をつけてください」

案内しながら歩を進めると、先ほど見つけたあの木が目に入った。

「ありました。お父様、お母様、あの木を見てください」

私は二人から手を離して、目的の木を指差す。

「珍しい木だわ。別々の二本の木が絡み合って、一本の木になっているのね」

「はい、それを連理の木といいます。まるで、お父様とお母様のようだとは思いませんか？」

「そう言われると、なんだかくすぐつたいね」

実は、前世で暮らしていた家の近所に、連理の木が御神木ごんじんぼくになっていて神社がありました。縁結

びや夫婦むすご和合わごの木きと呼よばれていて、カップルに人気にんきだったんですね。

あつ、いけない。私には、まだやらなきゃいけないことが残のこっていた。

お父様とお母様が感あ心しんしている隙すきに、私は魔法まほうを使うため集中する。

大丈夫。さっきこの木を見つけたあとに、シリウス先生と特訓とくくんしたじゃないか。そのときは上手

くいったんだから、絶対に成功する！

私は花冠はなかんむりを作つくった花畑はなはたけを思おもい描えきながら、イメージを膨ふらませて強く願ねがう。

「お願いします！ 空から素敵すてきな贈り物が降ふりますように!!」

すると、色とりどりの花々が、雪のように舞まい落ちおちてきた。

「幻想的な光景こうきやうだね」

「まるで、この木に祝福しゅくふくされているみたいだね！」

お父様とお母様は目を丸くしながら、ひらひらと舞まう花々に手てを伸のばしている。

知りませんでした!!

今にして思えば、ピクニックに行くことが決まったとき、二人は辞退するシリウス先生を熱心に誘っていました。

ふっ、不覚。今日がシリウス先生の誕生日だったなんて……

「まさか、リリアナは知らなかったのかい？ 去年はシリウス君が来たばかりで——どたばたして祝えなかったから、今年は気合いを入れてピクニックに行こうと言いだしたのだと思っていましたよ」

いえ、今日はお父様とお母様の結婚記念日だけだと思っていました。ああ、できれば、もうちょっと早くその情報が欲しかった。

まずい……私、なんの贈り物も用意していないよ。

「私、知りませんでした。ごめんなさい、シリウス先生」

日頃からお世話になっている大切な人の誕生日も知らないなんて、最低です、私。

両手でスカートをギュッと握りしめて、私はうなだれた。

するとシリウス先生が地面に膝をついて、声をかけてきた。

「リリアナ様は、おめでどう、とは言ってくださらないのですか？」

あつ！ 私はお祝いの言葉さえも言っていないよ!!

私は勢いよく顔を上げ、シリウス先生と目を合わせる。

「シリウス先生、お誕生日おめでどうございます！」

「ありがとうございます、リリアナ様。それにしても、なにを落ちこんでいらつしやったのですか？」

先生は穏やかな表情をしている。

「私、シリウス先生にお誕生日の贈り物を用意できませんでした」

私がいよいよしなから言うと、先生はゆっくりと首を左右に振った。

「いいえ、おめでどうの言葉だけで充分です。それに昼食は美味しかったですし、校外学習も楽しかった。それが、なによりの贈り物です。ありがとうございます、リリアナ様」

「うう、シリウス先生！」

なんて優しい人なんだ！

私は思わずシリウス先生に抱きついてしまった。首筋に顔を寄せると、先生の身体は少し硬直した。だけど徐々に力が抜けていき、先生は大きな手で頭を撫でてくれる。

「うふふ、微笑ましいわ。ねえ、ルイス」

「ああ、そうだね、アリス。リリアナはまだ幼い。だから抱きつかれた彼を許してあげよう。これが年頃だったら、シリウス君は即抹殺だな」

「ルイス、親バカが過ぎるわよ。それに子供の成長は早いよ、特に女の子はね」

「リリアナは、まだ九歳だ」

「あら、もう九歳よ。あと七年も経てば、リリアナちゃんは十六歳になって成人するわ。そうしたら、すぐに結婚するかもね。ルイス、今から覚悟を決めておいた方が良くわよ」

「十六歳で結婚なんて早すぎる！ このオリヴィリア領で、リリアナは私達と一緒にずっと暮らせ
ばいいんだ!!」

二人とも、大袈裟おおげさですよ……私は小さく息を吐いた。

その日の夜、私は自室で悩んでいた。

先生はああ言ってくれたけれど、やっぱりなにか贈り物をしたかったな。

でも、子供の私が大人のシリウス先生にあげられるものなんて、ほとんどない。どうしよう……
私は頭を抱えながら、部屋の中をぐるぐる歩きまわる。ふと、机の上に置かれた紙とペンが目
に入った。

あつ、アレなんていいかも！

私はすぐさま机の上のペンを握って、紙にさらさらと文字を書く。

うん、これならきつと喜んでくれるよね。

私は書き終えた紙を両手で広げ、にんまりと笑った。

そして先生の部屋へ向かうべく、自室をあとにした。

目の前のドアをトントン、と叩く。

起きてるかな？ 寝てたらどうしよう。今日のピクニックで、いつもより疲れているかもしれない
いし……

だけど、すぐに先生の声が聞こえた。

「誰だ？」

良かったよ。起きてる。

「シリウス先生、リリアナです。今、よろしいですか？」

すると扉がゆつくりと開いた。

「リリアナ様、こんな夜遅くにどうしたのですか？」

開いたドアから、夜着を纏まとったシリウス先生が顔を出す。

おお、大人のお色気ムンムンですね。

「夜分遅くにごめんなさい」

「いえ、まだ起きていたので構いませんが……。リリアナ様、幼いとはいえ、女性がこんな時間に
異性の部屋を訪ねるのは感心できませんね」

「ごめんなさい。これからは気をつけます。でも、どうしても今日中にお渡ししたい物があつ
て……」

「渡したい物？」

「シリウス先生、お誕生日おめでとーございます！」

私は手に握りしめていた紙を差し出した。先生は紙を受け取ると目を丸くする。

『なんでもする券』……。なんですか、これは？」

フッフッフ、見たことも聞いたこともないでしょう、先生。

『シリウス先生専用リリアナがなんでもする券』と書かれた三枚綴りのチケットです。日本では、子供が母の日や父の日などのイベントで作ることはあるけど、セイルレーンでは聞いたことないもんね。

「その券を使っただけならば、私が先生にしてほしいことをなんでもやります！ 肩叩きからお掃除まで、どんと来いです!!」

「これは、良いものをいただきました。大切に使用してもらいます。ありがとうございます、リリアナ様」

喜んでもらえて良かった。さあ、大切な言葉を伝えよう。

「シリウス先生、生まれてきてくれてありがとうございます。先生に出会えた幸運に感謝します」
今日は思い出がいっぱいあった、忘れられない一日になりました。



私の名前は、アリス・ラ・オリヴィリア。

本当はアリスは略称だし、正式には生家せいけの名前も入るのだけれど、ルイスと結婚してからはこの名で通している。

だって、貴族丸出しの長つたらしい名前なんですから。少くらしい薬をしてもいいじゃない。

私は生まれたときから、蝶よ、花よ、と育てられた。

そんな私が、今では辺境の地で三児の母をしているのだから、人生なにが起るかわからないものだけだわ。

でも、それは私が自ら選び取った人生。とても気に入っているの。

ルイスのもとに押し掛けて、初めて家事に挑戦したときは、やることなすこと散々な結果だった。だけど前領主の非道な行いのせいで、館に勤めてくれる人は誰もおらず、私は家事を続けざるをえなかった。料理をすれば火事になり、魔法で鎮火ちんか。洗濯をすれば、生地きじがボロボロになるか汚れたまま。掃除をすれば要領が悪くて、家中の物を壊してばかり。

そんな私を見かねたのか、いつしか領民達がお手伝いしてくれるようになった。そのときは、皆との距離が縮まったような気がして本当にうれしかった。その後、私の家事の腕は少しずつ上達していった、大変だけど面白く感じられるようになったわ。

やがて、私は愛するルイスの子供を身籠みこもった。

私のお腹なかの中にいたときから、子供は精霊に愛されていた。

私には、生まれつき『ある力』が備わっている。

それは、真実の眼。

その力を使うと、目の色が赤くなる。そして、魔法による変身を見破ったり、探し物のありかが分かったり、未来を知ったりすることができる。他にも同じ力を持った人はいるけれど、人によって、能力の形はそれぞれ。私の真実の眼の力は、大したことがない。精霊に祝福を授けられた者しか視みえない精霊の姿が視えるだけで、それ以外の能力はない。